

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:12-13.

短期入院の子どもの看護ケアに関する小児病棟看護師の認識

中川原 舞, 阿部 明美, 森 浩美, 板東 利枝

短期入院の子どもの看護ケアに関する小児病棟看護師の認識

旭川医科大学病院 4階西ナーステーション ○中川原舞 阿部明美
旭川医科大学 医学部 看護学科 森浩美 板東利枝

【目的】

子どもの平均在院日数は短縮化し、この傾向は今後も続くと予想される。また、現在の少子社会の影響を受け、小児病棟は閉鎖、もしくは大人との混合病棟化が進んでいる。これらの状況に看護師の配置転換も加われば、小児看護に携わる看護師の専門性は育ち難い状況となる。そのため、短期入院の子どもの看護の質を保証するための取り組みが重要と考える。

本研究の目的は、看護実践の場にある現状と課題を把握するために、短期入院の子ども（以下、子ども）の看護に関する小児病棟看護師（以下、看護師）の認識を明らかにすることである。

【方法】

1. 研究デザイン：質的記述的研究デザイン
2. 研究参加者：子どもを看護する看護師である。
3. 研究期間：2017年12月
4. データ収集方法：参加者同士の相互作用により意見を引き出したいと考え、フォーカスグループインタビュー（以下、面接）を行った。面接グループは1グループ5-6名とし、看護経験年数などが偏らないように編成した。面接は1グループ30分程度、研究者がインタビュアーとなり、許可を得て録音した。
5. 調査内容：主な質問は、現在、実践している看護と、看護の問題・課題などである。参加者の年齢や看護師経験年数などは、本人から情報を得た。
6. 分析方法：面接内容の逐語録を作成し、意味内容が損なわれないように単文化した。次に、単文を比較検討し、カテゴリーを抽出した。分析の全過程において小児看護学教員2名と臨床看護師2名で分析・結果の妥当性を検討した。
7. 倫理的配慮：参加者に研究目的・方法、参加の自由性、発言内容により参加者が評価されない、学会等で結果を公表する可能性などについて文書と口頭で説明し、同意を得た。面接は勤務時間外に行い、参加者の自由な発言を基本とした。本研究は研究者所属機関の倫理審査委員会と病院看護管理者の承認を得て実施した。

【結果】

1. 参加者の概要 女性13名、男性3名が参加し、年齢は22-48歳、平均27.3歳であった。看護師経験年数は3年以下7名、4-10年6名、11年以上2名であり、小児看護経験年数は3年以下12名、4年以上4名、平均2.5年であった。
2. 分析結果 面接は3回実施し、時間は29-43分、平均37分であった。総単文数141から、カテゴリー5が抽出された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕で表す。【通り過ぎていくような子どもに手厚く看護できない】は、子どもの疾患・治療が低侵襲であることや短期入院であることから、プライマリーナースになっても深く看護することができないと感じる看護師の認識を表す。サブカテゴリー〔入院期間が短く看護は深められない〕〔軽症であるために看護は浅い〕〔情報が少ない〕〔忙しいと優先順位は低くなる〕〔滞りなく予定通りに退院できればそれで良い〕で構成された。【十分な看護ができていないという実感がもてない】は、子どもに必要なと思う看護を実践しているも、その看護は十分なものではないと自己評価する看護師の認識を表す。サブカテゴリー〔長期入院の子どもの看護には達成感がある〕〔新人看護師の自分は最低限の看護が実践できていない〕〔自分達が実践している看護を肯定できない〕で構成された。【現状の中で工夫してできる看護をしている】は、十分とは言えないまでも、試行錯誤しながらできる看護を実践していると捉える看護師の認

識を表す。サブカテゴリー〔子どもの一般的な特性を捉える〕〔工夫して必要な情報収集をしている〕〔子どもと親を観て理解し看護している〕〔子どもと親の個別性を大事に看護している〕〔視覚教材を活用した患者教育にメリットを感じている〕で構成された。【充実感を得る看護もある】は、実践する看護の何もかもを否定的に捉えるのではなく、子どもと親への看護により、気持ちが満たされる体験もしている看護師の認識を表す。サブカテゴリー〔限られた状況でも充実感を得る看護がある〕で構成された。【叶えたい看護がある】は、子どもと親に提供したい看護を持ち得ており、現状に留まることを了承していない看護師の認識を表す。サブカテゴリー〔看護を今以上に充実させたい〕〔入院中の子どもと親の負担を減らしたい〕〔当事者である子ども中心に看護したい〕で構成された。

【考察】

看護師は、子どもが短期入院であるために看護が深められないと感じ、〔滞りなく予定通りに退院できればそれで良い〕という考えもあった。その中で、〔情報が少ない〕ということは看護を深められない原因であり、結果でもある。看護師は〔子どもの一般的な特性を捉える〕〔工夫して必要な情報収集をしている〕〔子どもと親を観て理解し看護している〕として、対応策を講じていた。短期入院では看護師が子どもや親と接する時間は限られている。外来看護師や医師から事前情報を得ることによって対象理解は深められ、短期間であってもポイントを絞った看護が可能になると考える。

一方、看護師には短期間の関りであっても、充実感が得られる体験もあった。看護師が子どもや親と関係を築き、看護の成果を実感できることはモチベーションアップに繋がり、叶えたい看護の実現にも向かうと推察する。制約がある中でも、看護師はできている看護とやるべき看護を明確にし、看護師自身が成功体験を積むことの重要性が示唆された。